
達成関連感情の認知的規定因

——結果に対する主観的評価と原因帰属について——

奈 須 正 裕

問題と目的

達成場面で喚起される感情（達成関連感情：achievement-related affects）の多様性を示し、これを体系的に取扱うべく、その認知的規定因に注目した整理の枠組みを最初に提唱したのは、Weiner（1977）であったと考えられる。Weiner（1977）によると、達成関連感情は、その主要な規定因の観点から、二つに分類することが可能であるという。一つは、その達成結果をどの程度の成功あるいは失敗とみるかという、結果に対する主観的評価に依存して喚起される感情であり、結果依存の感情と呼ばれる。よろこび（pleased）や落胆（dissapointment）といった感情がこれに属し、原因帰属などには影響を受けないと考えられた。もう一方は、成功・失敗そのものよりも、むしろ結果に対する原因帰属に依存して喚起される感情で、帰属依存の感情と呼ばれる。同程度に失敗であると評価された結果であっても、その原因を能力や適性に帰属すれば無能感（incompetence）を感じ、努力不足に帰属すればうしろめたさ（guilt）を、運に帰属すればおどろき（surprise）を感じるであろうというのである。Weinerは仮想場面及び被験者の回想を用いた研究（Weiner et al, 1978, 1979）によって、この分類の妥当性

を検証した。これらの研究がきっかけとなって、その後、達成関連感情について、Weiner が示したこの枠組みに基づく研究が数多くなされてきている。

しかしながら、その後の諸研究では、結果依存の感情にも原因帰属の影響が認められること（丹羽，1989；Russell & McAuley, 1986）や、逆に帰属依存の感情にも結果に対する主観的評価が関与すること（Forsyth & McMillan, 1981）が指摘され、分類の妥当性について疑問が投げかけられてきている。Weiner（1977）は、例えば結果依存という概念に帰属の影響をまったく受けないといった意味を含ませている（outcome dependent— attribution independent）ので、諸研究を総合すると、結果依存、帰属依存という概念によって、達成関連感情を二つに分類することにはやや無理があると言わざるを得ない。

このように、Weiner（1977）の提唱した結果依存、帰属依存という達成関連感情の分類には確かに問題が残る。しかし、少し視点を変えれば、彼の主張を、感情の分類理論としてではなく、達成関連感情の喚起に関して、Schachter 流の認知要因重視の立場（Schachter, 1964）に立ち、結果に対する主観的評価と原因帰属という二つの認知的規定因の存在を示唆したものと解釈することも可能であろう。むしろ、感情の分類に際して結果依存、帰属依存という概念が妥当であるか否かという問いの立てかたではなく、結果に対する主観的評価と原因帰属という二つの認知的規定因が、各達成関連感情の喚起においてどのような役割を果たしているのかというアプローチの方が、達成場面における感情経験の理解に関してより生産的なのではなかろうか。つまり、特定の感情について、結果に対する主観的評価と原因帰属という二つの認知的規定因のいずれか一方だけが関わるであろうということを仮説としてその採否を検討するのではなく、二つともが影響を及ぼす可能性を前提として考慮し、それぞれの影響の相対的な大きさや、影響の及ぼしかた、例えばそれぞれが感情に対して独立に影響しているのか、相互作用的に関わっているのかといったことを問題とするアプローチである。実際、ある達成

的結果を前にした時、まず人は得られた客観的結果に対して、あらかじめ持っていた予想などとの関連において、その結果についての主観的評価を行い、次にそのような結果となったのはいかなる原因によるのかについて思いをめぐらすであろう。このように考えるならば、結果に対する主観的評価と原因帰属という二つの認知要因を達成関連感情の規定因として位置づけること自体には一定の意味があると思われる。また、結果に対する主観的評価について、従来の諸研究は、これを単に成功と判断したか失敗と判断したかといった具合に2値的に取扱うことが多かったため、この概念のもつ意味を十分に検討し得ていないように思われる。さらに、操作定義にも確立されたものはなく、客観的結果との明確な区別について配慮した上で検討を行う必要もあろう。従来の研究には、このような視点はどちらかと言えば希薄であった。近年、我国においても原因帰属については、いくつか研究がなされてきている（奈須，1990；奈須・堀野，1991；丹羽，1989）が、結果に対する主観的評価との関連において原因帰属の果たす役割が十分に検討されてきたとはいえない。以上のような問題意識から、本研究では、達成関連感情の認知的規定因として、結果に対する主観的評価と原因帰属を位置づけ、それぞれが各達成関連感情にどのような影響を及ぼしているのかについて検討を行うことにする。

研 究 Ⅰ

目 的

結果に対する主観的評価が達成関連感情に及ぼす影響を検討する。

方 法

被験者 大学生204名（男子102名・女子102名）。後述する六つの実験条に男女17名ずつ計34名をそれぞれランダムに割当てた。

実験の概要 被験者に仮想の達成場面のシナリオを提示し、その場面での登場人物の感情経験を推測させ、感情語リストへの評定を求めた。シナリオの中に登場人物の結果に対する主観的評価を情報として含めてある。前述のように、結果に対する主観的評価に関して確立された定義は見当らない。そこで本研究では、結果に対する主観的評価を「事前の予想点と実際の得点とのずれに基づく主観的な成功・失敗の程度判断」と定義した。結果に対する主観的評価は、概念的には連続的な変数であると見なし得るが、ここでは実験操作として成功・失敗の各事態ごとに3段階を設定した。実験条件は、成功・失敗の2条件と結果に対する主観的評価の違いによる3条件の組合せによる6条件である。

刺激材料（シナリオ） 実験条件に即して6種類のシナリオがある。シナリオの一例を示す。

「今日、A君の通っている高校では、先日行われた定期試験の答案が返却されます。A君はある科目の試験成績が気がかりでした。というのも、その科目の試験成績がよいか、わるいかは彼にとってとても重要なことだったので。A君の名前が呼ばれ、先生から答案が手渡されました。A君は答案を受け取ると、まっさきに成績（点数）を見ました。A君の成績は80点で、これはA君が予想していた60点よりもずっとよい成績でした。」

結果に対する主観的評価は、シナリオの最後の1文の表現によって操作される。実際の得点はすべての条件で成功時80点、失敗時40点とし、事前の予想点の方を変化させることで両得点間のずれを3段階（20点、10点、5点）で操作し、さらにそれぞれに、ずっとよい（ずっとわるい）、よい（わるい）、少しだけよい（少しだけわるい）という主観的評価を付した。各条件ごとの表現は、以下のようなになる（括弧内は失敗時）。

ずっとよい（ずっとわるい）：A君の成績は80点（40点）で、これはA君が予想していた60点（60点）よりもずっとよい（わるい）成績でした。

よい（わるい）：A君の成績は80点（40点）で、これはA君が予想してい

TABLE 1 達成関連感情語リスト

成功場面 (5感情, 25語)	失敗場面 (7感情, 34語)
①よろこび：やったー、気分がいい うれしい、よろこび、よかった	①不愉快・困惑：情けない、最悪、ショック 悲しい、いやだなあ
②おどろき：意外だ、信じられない 本当かなあ：うっそー、次はどうなるかと不安	②無能感：がんばってもだめなんだ、劣等感 自分は頭がわるい、自信がなくなった 自分はなんてだめなやつなんだ
③統制感・向上心：がんばったかいがあった がんばってよかった、がんばったからなあ、やればできるんだなあ、今度もがんばろう	③罰の予感：先生におこられる 先生に申し訳ない、親におこられる 親に申し訳ない、親に見せたくない
④承認への期待：先生によろこんでもらえる 先生にほめられるぞ、親によろこんでもらえる、親にほめられるぞ、はやく親に見せたい	④後悔：もっとがんばればよかった がんばればもっとやれたのに どうしてもっとがんばらなかったのか 今度はがんばろう、がんばらなければ
⑤誇り・友人への意識：このくらいはあたり まえだ、自分は頭がいい、自慢したい気持ち、友達にどう思われるだろうか、他の人の成績はどうだったんだろう	⑤おどろき：まさか、信じられない、あぜん びっくりした、どうしてだろう
	⑥くやしき：くやしい、ちくしょう、残念 くそーという気持ち、がっかり
	⑦あきらめ：まあいいや、こんなものだろう やっぱり、しかたがない

た70点 (50点) よりもよい (わるい) 成績でした。

少しだけよい (少しだけわるい)：A君の成績は80点 (40点) で、これはA君が予想していた75点 (45点) よりも少しだけよい (わるい) 成績でした。

調査内容 奈須・堀野 (1991) が作成した感情語リスト (成功場面5感情, 25語, 失敗場面7感情, 34語) を用いた。感情語の具体的表現についてはTABLE 1を参照されたい。リストの各語を項目とし、それがその場面での登場人物の感情経験を表す言葉として「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの6段階で評定を求めた。

手続き 刺激材料及び調査内容はひとつのブックレットにおさめられ、各被験者に配布された。実験は集団式、無記名で実施された。実施場所は大学の講義室または演習室。所要時間は10分～20分程度であった。

結果と考察

各感情について、それぞれに対応する4ないし5項目の得点を加算し項目数で除したものを個人の各感情得点とした。結果に対する主観的評価の感情への影響を検討するため、各感情得点の平均値を群ごとに求め、1元配置3水準の分散分析を行い、5%水準で有意差の認められたものについてはTukey法による多重比較を行った。結果をTABLE 2に示す。

TABLE 2 結果に対する主観的評価による達成関連感情の違い(研究I)

感情	結果に対する主観的評価			F (2,99)
	ずっとよい (わるい)	よい (わるい)	少しだけよい (わるい)	
成功場面				
よろこび	5.40 ^a	5.25 ^a	4.73 ^b	7.81 ^{**}
おどろき	3.73 ^a	3.49 ^a	2.92 ^b	6.32 ^{**}
統制感・向上心	4.06	3.99	3.78	.61
承認への期待	2.52	2.62	2.45	.25
誇り・友人への意識	3.59	3.62	3.37	.91
失敗場面				
不愉快・困惑	4.50 ^a	4.31 ^{a,b}	3.86 ^b	3.68 [*]
無能感	3.11	3.22	3.34	.69
罰の予感	2.60	2.50	2.50	.08
後悔	4.41	4.84	4.43	2.06
おどろき	3.80 ^a	3.28 ^{a,b}	2.68 ^b	6.47 ^{**}
くやしき	4.47	4.45	4.26	.28
あきらめ	3.19 ^b	3.20 ^b	3.84 ^a	4.51 [*]

※平均値の右かたに付した英字が同じものについては、5%水準で有意差のないことを示す

⁺.05 < p < .10 * p < .05 ** p < .01

TABLE 2より、成功場面では、よろこびとおどろきの2感情が結果に対する主観的評価の影響を受けることが示された。多重比較の結果は、いずれの感情も、とてもよい及びよいの2条件の場合に、少しだけよいの場合に比べ評定値が有意に高いことを示しており、客観的な得点が同じであっても、当初の予想と比較した場合のずれが大きい場合に、よろこび及びおどろきの

感情喚起が強められることを示唆している。よろこびは、Weiner (1977) において結果依存の感情とされる pleased や happy に対応する感情と考えられることから、この結果は彼の見解を支持するものと言える。一方、おどろきは、Weiner (1977) における surprise に相当する感情であり、通常は主に運や他者など外的要因への帰属によって規定される感情と見なされる。本研究の結果は、予想得点と実際の得点とのずれの大きさによっておどろきの感情喚起が規定されることを示すものであるが、この関連が直接的なものであるのか、第3の変数を媒介とする間接的なものであるのかについては予断を許さない。当初の予想と実際の結果とのずれが大きい事態は典型的に運への帰属を生みやすい事態であり、実際には運帰属などを媒介としておどろきの感情を強めているのかもしれない。この点を明らかにするためにも、結果に対する主観的評価と原因帰属の両方を含めた研究が必要であると考えられる。なお、残る3感情については、群間の平均値差が有意とはならなかったことから、これらの感情の喚起には結果に対する主観的評価があまり影響しないものと思われる。

一方、失敗場面については、不愉快・困惑、おどろき、あきらめの3感情について、有意差が認められた。まず、不愉快・困惑に関しては、ずっとわるい場合に少しだけわるい場合に比べて評定値が高いことが示された。したがって、客観的な結果が同じであっても、当初の予想と比べてずっとわるかったと評価された場合には、不愉快・困惑の感情が相対的により強く感じられると考えられる。不愉快・困惑は、Weiner (1977) において結果依存の感情とされる displeasure や upset に相当する感情であると見なし得ることから、本研究の結果は Weiner 理論と整合的なものである。なお、成功場面におけるよろこびと失敗場面における不愉快・困惑は、通常、一般的な正・負の感情としていわば対をなす感情と見なされるが、本研究の結果は、これらが結果に対する主観的評価によって規定されるという喚起メカニズム上の共通性をも有することを示すものと解釈できる。おどろきについても、不愉快

快・困惑と同様に、ずっとわるい場合に少しだけわるい場合に比べて評定値が高いことが示された。ただし、結果に対する主観的評価とおどろきとの関係に関しては、成功場面と同じく、これが直接的なものなのか、それとも運などへの帰属を媒介とする間接的なものなのかというさらなる疑問を提出する必要がある。最後に、あきらめの感情についてであるが、ここでは結果に対する主観的評価と感情喚起の関係が上述の諸感情に関する結果とは逆の方向を示していることに注意したい。結果は、少しだけわるい場合に他の2条件と比べてあきらめの感情が強く感じられることを示している。同じ客観的結果を前にしても、それがあらかじめの予想とさほどくいちがいのないものであれば、「こんなものだろう」「やっぱり」と感じ「しかたがない」という気にもなるが、予想とのずれがある程度大きくなるとあきらめの気持ちが起こりにくいのだと解釈できよう。

研究 II

目的

結果に対する主観的評価及び原因帰属が達成関連感情に及ぼす影響を検討する。

方法

被験者 大学生544名（男子272名・女子272名）。後述する16の実験条件に男女17名ずつ計34名をそれぞれランダムに割当てた。

実験の概要 研究Iと同様に、仮想の達成場面のシナリオを提示し、登場人物の感情経験を推測させた。シナリオの中に登場人物の結果に対する主観的評価及び原因帰属を情報として含めてある。主観的評価は成功・失敗とも、事前の予想点と実際の得点とのずれに基づいて2段階とした。原因帰属は、奈須・堀野（1991）において達成関連感情との関連が確認されている、努力、能力・適性、他者、運の四つが用いられた。実験条件は、成功・失敗

の2条件と結果に対する主観的評価の違いによる2条件及び原因帰属の違いによる4条件の組合せによる16条件である。

刺激材料（シナリオ） 実験条件に即して16種類のシナリオがある。シナリオは、登場人物による原因帰属を表現した1文が最後に付加えられている以外は、研究Iで用いたものと同じものである。付加えられる文の一例を示す。

「A君はこの成績の原因について考え、よく努力して勉強していたから、このような結果になったのだと思いました。」

原因帰属はこの1文の表現によって操作される。実験条件によって、帰属先に関する部分の記述をそれぞれ以下のように変えてある（上段は成功条件、下段は失敗条件の場合の表現）。

努力：よく努力して勉強していたから

あまり努力せず勉強しなかったから

能力・適性：自分はこの科目の勉強に適性があり、むいているから

自分はこの科目の勉強に適性がなく、むいていないから

他者：先生が熱心によく指導してくれたから

先生がしっかりと指導してくれなかったから

運：なにかにつけて運がよかったから

なにかにつけて運がわるかったから

結果に対する主観的評価は、研究Iと同様の方法で操作した。ただし、水準については、ずっとよい（ずっとわるい）と少しだけよい（少しだけわるい）の2段階とした。

調査内容及び手続きは研究Iと同じである。

結果と考察

研究Iと同様にして各感情得点を算出した。結果に対する主観的評価と原因帰属の感情への影響を検討するため、各感情得点の平均値を群ごとに求め、

TABLE 3 結果に対する主観的評価と原因帰属による達成関連感情の違い (研究II)

感情	結果に対する主観的評価			原因帰属					交互作用 F (3,264)	
	ずっと (N=136)	少しだけ (N=136)	主効果 F (1,264)	努力 (N=68)	能力・適性 (N=68)	他者 (N=68)	運 (N=68)	主効果 F (3,264)		
<u>成功場面</u>										
よろこび	5.38	4.86	35.88**	5.27	5.05	5.13	5.03	1.61	1.45	
おどろき	3.77	3.02	40.77**	3.29	3.45	3.39	3.46	.47	1.51	
統制感・向上心	3.94	4.00	.29	4.38 ^a	3.96 ^a	4.06 ^a	3.47 ^b	9.27**	1.87	
承認への期待	2.96	2.56	7.57**	2.63 ^{ab}	2.76 ^{ab}	3.11 ^a	2.56 ^b	2.77*	.60	
誇り・友人への意識	3.25	3.43	2.93 ⁺	3.43	3.41	3.30	3.21	.98	.46	
<u>失敗場面</u>										
不愉快・困惑	4.59	3.93	36.09**	4.10	4.28	4.42	4.21	1.49	.87	
無能感	3.32	3.10	3.74 ⁺	3.02 ^b	3.52 ^a	3.02 ^b	3.26 ^{ab}	4.24**	1.05	
罰の予感	2.72	2.70	.01	2.63	2.59	2.91	2.71	1.41	1.17	
後悔	4.32	4.18	1.07	4.75 ^a	3.99 ^b	4.07 ^b	4.17 ^b	17.25**	1.51	
おどろき	3.86	2.82	60.01**	3.10 ^b	3.31 ^{ab}	3.66 ^a	3.27 ^{ab}	3.12*	.44	
くやしき	4.58	4.09	19.00**	4.27	4.25	4.42	4.39	.64	1.16	
あきらめ	3.35	3.83	14.50**	3.90 ^a	3.56 ^{ab}	3.30 ^b	3.61 ^{ab}	3.77*	.28	

*平均値の右かたに付した英字が同じものについては、5%水準で有意差のないことを示す

+ .05 < p < .10 * p < .05 ** p < .01

2 元配置（結果に対する主観的評価 2 水準×原因帰属 4 水準）の分散分析を行い、原因帰属については 5 % 水準で有意差の認められたものに関して Tukey 法による多重比較を行った。結果を TABLE 3 に示す。

TABLE 3 より、成功場面については、よろこび、おどろき、承認への期待の 3 感情において、結果に対する主観的評価の主効果が有意となった。いずれも、ずっとよい場合に、その感情がより強く感じられることを示している。よろこびとおどろきに関する結果は研究 I の知見を追認するものである。承認への期待に関する結果は、研究 I では見出し得なかったものであるが、当初の予想と比べてとてもよい結果であったと判断した場合に「先生（親）にほめられるぞ」「先生（親）によるこんでもらえる」という気持ちが相対的に強く感じられるという結果自体は理解可能なものであると思われる。当人の予想した得点は、他者にとっても順当なものである場合が多いであろうから、実際の結果がそれよりずっとよいものであったならば親や教師が承認しほめてくれるであろうという期待感を生みやすいのだと解釈できる。

原因帰属の主効果は、統制感・向上心と承認への期待において有意となった。多重比較の結果、統制感・向上心については、運帰属の場合に他の 3 条件と比べて評定値が有意に低いことが示された。運の外的で不安定で統制不可能な特質（Weiner, 1979）から考えて、運に帰属された成功が「やればできるんだなあ」「今度もがんばろう」といった気持ちの喚起と縁遠いのは納得し得るところである。承認への期待については、他者帰属下において運帰属の場合よりも承認への期待が強く感じられるという結果が得られた。成功を先生の指導の熱心さに帰属することの背景には、当事者と教師との良好な人間関係の存在が暗示されており、したがってそのような帰属を行う者は「先生にほめられる」ということを強く意識するであろうという解釈によって反応がなされたのかもしれない。なお、結果に対する主観的評価と原因帰属の交互作用はすべて有意ではなかった。

一方、失敗場面については、不愉快・困惑、おどろき、くやしき、あきら

めの4感情において結果に対する主観的評価の主効果が有意となった。結果は、不愉快・困惑、おどろき、くやしきの3感情では、ずっとわるい場合に評定値が高く、これとは逆にあきらめについては少しだけわるい方が評定値が高いというものであった。不愉快・困惑、おどろき、あきらめの3感情に関する結果は研究Iの結果を追認するものである。くやしきに関しては、研究Iでは特に明瞭な結果は見出し得なかった。しかし、くやしきの中核をなすのはある種の不満感であると考えられることから、予想外にわるい結果であった場合に「くやしい」「ちくしょう」といった不満の気持ちを抱くのは自然なことであるとも考えられ、解釈可能な結果であると思われる。

原因帰属の主効果は、無能感、後悔、おどろき、あきらめの4感情において有意であった。多重比較の結果、無能感については、能力・適性帰属の場合に努力帰属及び他者帰属の場合と比べて評定値の高いことが示された。失敗したのは「適性がなく、むいていないから」と考えることにより、「劣等感」を感じ「がんばってもだめなんだ」と思うのであろう。後悔については、努力帰属の場合に他の3条件と比べ評定値が高かった。努力不足によって失敗したと見なすことにより「もっとがんばればよかった」と反省し、「今度はがんばろう」と決意するのだと解釈できる。あきらめに関する結果は、努力帰属の場合に他者帰属と比べて評定値が高いというものであった。自分がやるべき努力を怠っていたのであればあきらめもつくが、先生の不熱心さのような他者にとって統制可能な(Weiner, 1979)要因のせいで自分が失敗したということであれば、あきらめきれないのだと解釈できよう。無能感、後悔、あきらめに関するここでの結果は、奈須・堀野(1991)の結果を追認するものであり、これらの知見の安定性を示唆するものと考えられる。おどろきに関しては、他者帰属の場合に努力帰属に比べ評定値の高いことが示された。Weinerら(1978, 1979)も、失敗時には他者帰属を含む外的帰属下においておどろきの感情喚起が強いことを見出しており、ここでの結果は彼らの知見と整合的なものと言える。

なお、結果に対する主観的評価と原因帰属の交互作用は、成功場面と同じく失敗場面においてもすべての感情において有意とはならなかった。このことから、結果に対する主観的評価と原因帰属という二つの認知的規定因は、達成関連感情に対し相互作用的ではなく、独立に影響を及ぼすと考えられる。

研究 III

問題と目的

研究 I, II において、結果に対する主観的評価がいくつかの感情に促進的あるいは抑制的影響を及ぼすこと、結果に対する主観的評価と原因帰属はそれぞれ独立に感情を規定していることなどが明らかとなった。しかし、仮想場面実験の結果が実際の達成場面での現象を反映しているかどうかを疑問視するむきもある (McFarland & Ross, 1982)。また、研究 I, II では、客観的成績の効果を取扱わなかったが、感情喚起が客観的成績の高低によって影響されている可能性は十分に考えられるところである。さらに、結果に対する主観的評価はいわば主観的成績であり、客観的成績のはたらきとの関連において、その感情への影響のしかたを検討することも重要な課題であると思われる。このような問題意識から、研究 III では、達成課題として中学校数学の中間試験を取り上げ、試験成績、それに対する生徒の主観的評価及び原因帰属がそこでの感情の喚起にどのような影響を与えるのかについて考察する。

方法

調査対象 中学 3 年生 148 名 (男子 84 名・女子 64 名)

調査内容 以下の四つについて評定が求められた。

- ① 試験結果に対する成功・失敗判断：試験の結果について成功であったか失敗であったかの判断を求めた。

- ②試験結果に対する主観的評価：試験の結果について事前の予想点との関連において評価を求めた。評定は、「予想点よりずっとよかった」から「予想点よりずっとわるかった」までの6段階で行われた。
- ③原因帰属：四つの帰属因（努力：毎日の予習・復習，能力・適性：自分の数学への向き・不向き，他者：先生の指導の熱心さ，運：たまたまの運のよさ・わるさ）について，それが自分の試験成績にどの程度影響したと思うかを，「とても影響した」から「まったく影響しなかった」までの6段階でたずねた。
- ④感情：研究Ⅰ，Ⅱと同じく，TABLE 1 に示した感情語リストを用いた。評定に際しては，各項目が，試験結果を受け取った今の気持ちとしてどのくらいあてはまるかを「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの6段階でたずねた。

手続き 中間試験後の最初の数学の授業時に，教科担任教師によって学級単位で実施された。答案返却と同時に調査用紙が配付され，各自のペースで回答してもらった。所要時間は10分～20分程度であった。

結果と考察

回答に不備のあった10名を除く138名の内，試験結果を失敗と判断したものが115名と大多数を占めていたので，これらを失敗群とし，失敗場面についてのみ分析することにした。客観的成績，結果に対する主観的評価，原因帰属が感情に及ぼす影響について検討するために，失敗時の各感情を基準変数とし，試験成績，結果に対する主観的評価，四つの原因帰属を説明変数とした重回帰分析を行った。結果をTABLE 4 に示す。

TABLE 4 より，試験成績に関しては，無能感，罰の予感，あきらめの3感情において標準偏回帰係数が有意となった。結果は，いずれも，試験成績がわるいほど感情喚起が強められるというものである。一方，結果に対する主観的評価については，不愉快・困惑，無能感，罰の予感，おどろき，くや

TABLE 4 中学数学学習における達成関連感情の重回帰分析結果(研究III：N=115)

失敗感情	試験	評価	努力	能力・適性	他者	運	R ²
不愉快・困惑	-.14	-.34**	.10 *	.14	.05	.00	.20**
無能感	-.35**	-.22**	-.24**	.29**	.02	.17+	.27**
罰の予感	-.25**	-.27**	-.08	.21+	.17+	-.02	.20**
後悔	.07	-.13	.24*	.17	.03	.03	.17**
おどろき	-.04	-.53**	-.03	.04	.18*	.09	.33**
くやしき	.06	-.34**	.05	.09	.11	.04	.15**
あきらめ	-.33**	.18+	-.09	.04	.01	.25*	.15**

※表中の数値は標準偏回帰係数及び決定係数

試験：試験結果 評価：結果に対する主観的評価

+ .05 < p < .10 * p < .05 ** p < .01

しさの5感情において標準偏回帰係数の検定結果が有意水準に達した。いずれも、予想との比較においてよりわるかったと評価するほど、各感情が強く感じられることを示す結果である。またあきらめにおいては、標準偏回帰係数に有意な傾向が認められた。予想よりもわるかったと評価するほどあきらめの感情喚起が低い傾向があるというものである。これらの結果の内、不愉快・困惑、おどろき、くやしき、あきらめに関する知見は、研究I、IIの結果を追認するものである。無能感と罰の予感については、研究I、IIでは結果に対する主観的評価の影響は特には認められなかった。両研究間での結果の相違が、被験者の年齢段階によるのか、仮想場面と実際の達成場面という研究方法の違いによるものなのかは不明であり、さらなる検討が望まれるが、自我関与の高い事態で得られた本研究の結果をより重視すべきであると考えるのが適当であろう。以上の結果から、客観的成績である試験成績といわば主観的成績である結果に対する主観的評価の双方が、それぞれ各感情の喚起に深く関与していることが明らかとなった。特にあきらめに関する結果は、客観的成績と主観的成績が逆の方向で影響を与えているというものであり、注目に値する。

原因帰属に関しては、無能感、後悔、おどろき、あきらめの4感情につい

て影響が確認された。まず、無能感について、努力帰属との間の負の標準偏回帰係数及び能力・適性帰属との間の正の標準偏回帰係数が有意となった。失敗を能力・適性に帰属するほど、また逆に努力に帰属しないほど、無能感が強く感じられることを示すものであり、研究IIの結果と整合的な知見であると言える。後悔については、努力との間の正の標準偏回帰係数が有意であった。後悔に関しては、研究I、IIでも結果に対する主観的評価の影響は一切認められておらず、努力帰属によってのみ規定されることが示されていた。ここでの結果はこれを追認するものであり、さらに後悔の感情には客観的成績の影響をも受けにくいという特質のあることを示唆するものである。おどろきについては、他者帰属との間に有意な標準偏回帰係数が示された。結果は、失敗を他者のせいだと考えるほどおどろきの感情喚起が強められるというものであり、研究IIで得られた結果と同一のものである。最後に、あきらめに関して、運帰属との間に有意な正の標準偏回帰係数が認められた。失敗したのは運がわるかったためだと思うことにより「しかたがない」というあきらめの気持ちが感じられやすいというものである。

以上のことから、本研究の結果は、全体としてはほぼ研究I、IIの知見を追認するものと考えることができよう。被験者の年齢段階、研究方法を異にする両研究間でのおおむねの結果の一致は、結果に対する主観的評価と原因帰属の感情の規定因としてのはたらきがある程度の安定性を有していることを示唆している。さらに、客観的指標である試験成績も、いくつかの感情の喚起に関わっていること、また客観的成績とそれに対する主観的評価は、感情の喚起に対してやや異なった役割を果たしていることなどが示された。

研究 IV

問題と目的

研究IIIでは、仮想場面を用いた研究I、IIの知見が実際の達成場面におい

でもほぼあてはまることが示された。しかし、調査実施上の制限から、研究IIIでは失敗場面についての検討しか行うことができず、この点は問題として残るであろう。中高生を対象に同様の調査を実施した諸研究（相川ら、1986；奈須、1990）においても、ほぼ同じ理由から失敗場面についての検討にとどまっている。中高生が試験成績をなぜ悲観的に位置づけるのかは不明であるが、一つには中学、高校での評価が多くの場合に相対評価的であることが関わっている可能性が考えられる。相対評価では、少なくともほぼ半数の者が自身の結果を失敗と見なさざるを得ない。このような特質をもつ相対評価的な被評価経験を重ねることにより、成績についての悲観的な自己評価傾向が助長されていると考えられなくもなかろう。これに対し、大学の試験は絶対評価的に採点される場合が比較的多いように思われる。ある一定の基準を満たせば、それがたとえ全員であつてもよい成績が与えられるのである。そこで、研究IVでは大学生を対象に、一般教養の心理学の試験を達成課題とし、成功場面の感情について検討することを目的とする。

方 法

調査対象 大学1年生48名（男子31名・女子17名）

調査内容 原因帰属に関して、努力をふだんからの努力（ふだんからの学習態度）と直前の努力（試験前日の努力）に分けてたずねた以外は、研究IIIとまったく同じである。

手 続 き 研究IIIと同様の手続きで、試験後の最初の心理学の授業時に担当教官によって実施された。所要時間は10分～20分程度であった。

結果と考察

合格ラインである60点以上をとった44名の内、結果を成功と判断した39名を成功群とし、分析の対象とした。研究IIIと同様に、成功時の各感情を基準変数とし、試験成績、結果に対する主観的評価、五つの原因帰属を説明変数

TABLE 5 大学心理学学習における達成関連感情の重回帰分析結果(研究Ⅳ：N=39)

成功感情	試験	評価	努力Ⅰ	努力Ⅱ	能力・適性	他者	運	R ²
よろこび	.11	.53**	-.01	.19	.16	.21	-.07	.50**
おどろき	-.03	.45**	-.03	-.10	.03	.21 ⁺	.42**	.77**
統制感・向上心	-.03	.15	.13	.60**	.01	.15	-.07	.55**
承認への期待	-.01	.36	-.14	.12	.06	.28	-.20	.23
誇り・友人への意識	-.03	.12	.14	.29	.24	-.33 ⁺	.25	.32 ⁺

※表中の数値は標準偏回帰係数及び決定係数

試験：試験結果 評価：結果に対する主観的評価

努力Ⅰ：ふだんからの努力 努力Ⅱ：直前の努力

⁺.05 < p < .10 * p < .05 ** p < .01

とした重回帰分析を行った。結果を TABLE 5 に示す。

TABLE 5 より、客観的な試験成績については、どの感情においても、その標準偏回帰係数が有意とはならなかった。この結果は、客観的な成績自体はあまり成功場面の感情喚起に影響しないことを示唆するものと解釈できる。次に、結果に対する主観的評価については、よろこびとおどろきの2感情において、有意な正の標準偏回帰係数が示された。これは研究Ⅰ、Ⅱと整合的な知見であり、試験結果を予想以上によかったと評価した場合によろこびとおどろきの感情が強められるというものである。原因帰属については、おどろきに関して運帰属との間に、また統制感・向上心に関して直前の努力との間に、それぞれ有意な正の標準偏回帰係数が認められた。運帰属下でおどろきの感情喚起が強められるという結果は、Weiner (1977) の見解を支持するものと言える。また、成功を努力に帰属した場合に統制感・向上心が高まるという結果は研究Ⅱの知見と整合的なものである。このように、成功時の感情についても、失敗時と同様に、実際の達成場面において仮想場面で得た結果がおおむね再現されることが示された。

ま と め

本研究では、Weiner (1977) の理論枠組みを参考に、結果に対する主観的評価と原因帰属が達成関連感情の喚起に及ぼす影響について、仮想場面を用いた実験及び実際の達成場面での調査を通して検討を行ってきた。それによって以下の諸点が明らかとなったと思われる。

まず、結果に対する主観的評価は、典型的には、よろこびや不愉快・困惑のような一般的な正・負の感情とおどろきの感情の喚起に大きな影響を与えていることが示唆された。特に、よろこびと不愉快・困惑に関しては、原因帰属や客観的成績の影響が一切認められず、このことから一般的な正・負の感情はもっぱら結果に対する主観的評価によって規定されていると考えられる。また、結果に対する主観的評価のおどろきへの影響については、それが運などへの帰属を媒介としている可能性も考慮されたが、研究III, IVにおいて原因帰属の影響を差し引いた場合にも結果に対する主観的評価の影響が認められたことから、ある程度の直接効果があるものと思われる。なお、結果に対する主観的評価は、それ以外の感情の喚起にも多少の影響を与えていた。

次に、研究IIにおいてすべての感情について交互作用が認められなかったことから、結果に対する主観的評価と原因帰属の達成関連感情への影響の与え方は相互作用的なものではなく、それぞれが独立に各感情の喚起に関わっていることが示唆された。

さらに、研究IIIより、客観的成績と結果に対する主観的評価はそれぞれ感情の喚起に関わっているが、あきらめの場合のように、その影響を与える方向が逆であることもあり、相互にやや異なったふるまい方を示すと解釈できる結果が得られた。

最後に、研究の方法論に関して、仮想場面を用いた実験結果と実際の達成場面での調査研究の結果はかなり一貫したものであり、しばしば危惧される

ように、仮想場面を用いた検討が実際の達成場面での現象を反映していないとは考えにくいことが示唆された。

付 記

本研究の内、研究Ⅰ，研究Ⅱは、1990年度の東京大学大学院教育学研究科における教育心理学演習（教育と発達Ⅰ）の中で行われたものです。担当の井上健治先生（東京大学教育学部），協同で作業を進めて下さった平林秀美さん（東京大学教育学研究科）はじめ，貴重な御助言をいただいた参加者のみなさんに感謝いたします。また，実験及び調査の実施にあたっては，大塚雄作先生（放送教育開発センター），鎌原雅彦先生（帝京大学文学部），後藤幸一先生（足立区立第一中学校）に御協力いただきました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 相川充・川島勝正・松本卓三 1985 原因帰属が学業試験の成績に及ぼす影響—Weinerの達成動機づけに関する原因帰属モデルの検討— 教育心理学研究, **33**, 195-204.
- Forsyth, D. H., & McMillan, J. H. 1981 Attributions, affect and expectations: A test of Weiner's three-dimensional model. *Journal of Educational Psychology*, **73**, 393-403.
- McFarland, C., & Ross, M. 1982 Impact of causal attributions on affective reactions of success and failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 937-946.
- 奈須正裕 1990 学業達成場面における原因帰属，感情，学習行動の関係 教育心理学研究, **38**, 17-25.
- 奈須正裕・堀野緑 1991 原因帰属と達成関連感情 教育心理学研究, **39**, 332-340.
- 丹羽洋子 1989 児童の達成における原因帰属—感情反応について 教育心理学研究, **37**, 11-19.
- Russell, D., & McAuley, E. 1986 Causal attributions, causal dimensions and

- affective reactions to success and failure. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 1174-1185.
- Schachter, S. 1964 The interaction of cognitive and physiological determinants of emotional state. In L. Berkowitz (ed.), *Advances in experimental social psychology*, Vol. 1. New York : Academic Press.
- Weiner, B. 1977 Attribution and affect : Comments on Sohn's critique. *Journal of Educational Psychology*, **69**, 506-511.
- Weiner, B. 1979 A theory of motivation for some classroom experiences. *Journal of Educational Psychology*, **71**, 3-25.
- Weiner, B., Russell, D., & Lerman, D. 1978 Affective consequences of causal ascriptions. In Harvey, J. H., Ickes, W. J., & Kidd, R. F. eds., *New directions in attributional research*. Vol. 2. Hillsdale, New Jersey : Erlbaum.
- Weiner, B., Russell, D., & Lerman, D. 1979 The cognition—emotion process in achievement—related contexts. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 1211-1220.